

序

熊本野生生物研究会 会長

西岡 鐵夫

今年は熊本野生生物研究会創立25周年です。この間、精力的に野生生物の調査に関わり、その学びの中から理科教育や環境教育の発展に寄与する活動を行ってきました。この記念すべき年に会誌が発行されることは偶然ではなく、私たちの四半世紀にわたる活動の成果を世に問うべく、25周年記念事業の一環として取り組みました。本会誌をお手に取っていただく皆様には、私たちの活動をご理解していただければ幸いです。

本会々則にある「研究活動と教育に寄与する」という目的に沿って構成される会誌は、貴重な研究成果の発表の場であるばかりか、公表の場を得られにくい研究成果・論考・意見の発表の場としても貴重なものではないかと考えています。熊本県の小さな「会」とはいえ本会の会誌は、生物多様性保全の理念からは大きなものがあると自負しています。個々の会員のみならず会員同士が協力し、地道な調査の下で考察・研究を重ねたものが纏め上げられたものなのです。

さて、10月18日～29日に名古屋で「生物多様性保全の保存を目指す」COP10（生物多様性条約第10回締約国会議）が開催されます。その内容には本会がかねてより目標とし、実践してきたものと共通点があります。そのひとつの象徴的なものは、2009年（平成21年）3月の会誌5号発行の後、7月には森羅万象の極みとも言える「皆既日食」観察隊を屋久島に派遣したことです。隊員は人生観が変わるほどの体験をしました。このことは、生物多様性保全の基礎でもある森羅万象の再認識や再発見に連なるもので、自然環境の悪化が危惧されるさなか、非常に重要な意味を持ちます。

ところで、本会設立にきっかけともなった「カモシカ調査」の今年度の夏の実施は、宮崎県下で生じた口蹄疫問題の余波を受けて中止になりましたが、この夏の猛暑の中でも他の様々な調査は盛んです。いずれは、調査地域の生態系の機能上の問題点を明確にして対策を提起することができることになるでしょう。そのためにも地道な調査研究とその記録となる本会「会誌」の重要性が増すことになります。

この会誌6号の発刊にあたって、ご尽力いただいた編集委員会を始め、協力いただいた多くの方々に厚くお礼申し上げ、本会の今後の発展のためにも忌憚のないご意見をお願いして挨拶の言葉といたします。

平成22（2010）年8月吉日